

青年期における社会的スキルの発達的変遷 —メタ認知・对人的距離化スキルの機能から—

石井佑可子

問題

効果的な対人関係行動とはどのようなものかを詳らかにする試みは社会的スキル研究によって長年なされており、既に多くの研究蓄積がある。社会的スキル概念では、コミュニケーションの巧拙がそれに必要なスキル(技術)の有無に左右されると捉える。これまでの研究知見に従うならば、社会的スキルを高く有している個人は様々な社会的適応性を備えており、例えば仕事面での誠実さ・職務遂行能力・給料(Witt & Ferris, 2003)、CMCでの精神的健康(五十嵐, 2002)、学業成績(Hall & Gaeddert, 1960)など人生の様々な面での適応的な結果と社会的スキルの高さとの関連が示されている。反対に社会的スキルの不足は、精神的健康の阻害(Argyle, 1967など)、抑うつ(Segrin & Abramson, 1994など)、孤独感(和田, 1991など)など、様々な不適応状態と関連すると報告されている。さらには精神遅滞の子ども(Doll, 1953)や学習障害やアスペルガー症候群の人々が社会的スキルに問題を抱えていること(Whitehouse, Chamberlain & O'brien, 2001など)も指摘されている。また実践介入の場でも、後天的に獲得可能という社会的スキル概念を基としたソーシャルスキルトレーニング(SST)が積極的に利用されている(総説としてHargie, 2006など)。社会的スキルは、良好な対人関係行動それ自体を支えるのみならず、その後の社会的適応にもつながる、重要な技量だといえる。

一方で、これまでの社会的スキル概念やその測定、及びそれらを用いた実践介入は、現実生活への般化や生態学的妥当性に弱点を持つと批判され続けてきた(Marzillier, 1978; Trower, 1995; DeRosier & Marcus, 2005; 渡辺・星, 2009など)。即ち、机上の研究によって有効と

想定されているスキルを実際の生活において行使できる可能性が低いことや、たとえスキルを身につけたとしても、そのスキルが日常生活を送る上での効果を持たないかもしれないことが考えられるのである。しかしそれにも関わらず、社会的スキル研究において、この弱点についての考察は十分にはなされず、スキル概念の定義自体についても統一見解が見られないままである（定義の一覧として、相川，2009参照）。そのため、社会的スキル概念の現実場面における意義は実証されないまま、いわば無批判的に多くのコミュニケーション教育に利用されている。こうした現状を鑑みると、社会的スキル概念やその測定について、今一度抜本の見直しをしなければならないだろう。

こうした問題に関して石井（2006）は社会的スキル研究の現況を概観し、従来研究が、特に測定において社会的スキルとして取り上げているのは親和や主張などといった所謂「望ましい」表出形態のコミュニケーションに限定されている点と、社会的スキルを個別のパフォーマンスだけではなく状況認知を組み込んだ処理過程全体とする立場や、階層性を持つと捉える立場が多いにも関わらず、測定やSST時においてはスキル行使時の状況要因について考慮が不足している点とを指摘した。そして、これらの点が社会的スキル概念の現実味を欠如させ、生態学的妥当性が低める原因になっていると主張し、現実場面に効果を持つ社会的スキル行使を検討するために、スキルレパートリーの多様性や状況の認知及びそれらに基づいたスキルの巧みな調節を重視した処理過程、「メタ・ソーシャルスキル」モデルの提案を行った。

石井が「メタ・ソーシャルスキル」モデル提案の中で特に強調したのは、社会的スキル行使時のメタ認知の重要性と、社会的スキルのリストに、回避や欺瞞など、従来望ましくないとされてきたネガティブコミュニケーションを含める必要性である。実際に我々が生活している場を思い浮かべると、現実的には綺麗事ですませられないことが多々あり、ネガティブなスタイルのコミュニケーションをポジティブな（親和や主張などの）コミュ

ニケーションと併せ、巧みに使用することで、日々をうまく過ごしていることは容易に推測できる。実際に、欺瞞がごく普通の生活において使用及び受容されていること（村井，2000；DePauloら，2004など）や、回避的コミュニケーションには部分的ながら効果が認められること（原田，1998；畑中，2003；繁耕・池田，2003など）がすでに明らかになっている。しかしながら、ネガティブコミュニケーションは従来の社会的スキル研究では焦点を当てられていなかった。社会的スキルの要件はそれが対人関係において効果を持つこととされている（Spitzbergら，1988）が、ネガティブコミュニケーション由来のスキルがその要件を満たすか、またスキルとして扱える場合にいかなる効果や機能性を有しているかについては検討されてこなかった。

そこで、石井（2007）は大学生らを対象としたインタビュー調査によってネガティブコミュニケーションの実態把握を行い、それらの適切性や現実的な使用可能性についての評定結果を元に、社会的スキルと考えられるネガティブコミュニケーションのリストを選出した。その上で、従来の社会的スキルと重複する、主張や関係維持行動からなる「対人的接近化スキル」と、回避や欺瞞など、内面の気持ちを正直に表明しない、関係を終息させるコミュニケーション行動からなる「対人的距離化スキル」との2因子構造の尺度を作成した¹。また、前述したようにこれまでの研究ではスキル測定の際に状況要因が考慮されることは無かったが、この対人的接近－距離化スキル尺度では、スキル行使時の状況要因の検討として、各項目のスキル行動に親密性の度合いが異なる相手を3種類設定し、それぞれの相手に対する行使程度を問う形式をとり、相手に応じたスキル行使の調節傾向を測定するよう試みた。

さらに、社会的スキルが高い人は常に状況を察知して適切な反応をす

1 石井（2007）時点では、これらのスキルは「表出スキル」「非表出スキル」と命名されていたが、石井・新堂（2011）において、より内容に即した名称に変更された。

るための情報を得 (Hargie, 2006)、セルフモニタリングが高く (Snyder, 1974, 1987など)、より効果的な交渉ができる (Jordan & Roloff, 1997) など、状況を認知する力と社会的スキルとの関連が指摘されていることを受け、スキル行使時の状況判断について社会的情報処理モデル (Dodge, 1986) を参考に、コミュニケーション状況や相手との関係性の把握、自らのスキルレパートリーについての知識などを問うメタ認知尺度も併せて作成した。そしてスキル行使の測定と、その行使時におけるメタ認知の測定とを組み合わせるよう目指した。

これらの尺度を使用したこれまでの調査では、青年期後期にあたる大学生において、メタ認知が自尊感情やポジティブ情動の高さと関連することが示されている (石井, 2011)。この研究では距離化スキルが単独では殆どが自尊感情やポジティブ情動の低さやネガティブ情動の高さと関連する一方で、親密性中条件である「半知り」の相手に対しては、その行使得点の高さがポジティブ情動に正の方向で影響することや、メタ認知との相互作用効果が見られ、メタ認知を高く働かせた上での距離化スキル行使の高さは、社会的適応の各指標の高さと関連することも明らかになっている。また青年期中期段階の軽度非行少年と一般高校生を比較すると、非行群は対照群と比較して接近スキルが有意に高く、距離化スキルやメタ認知は有意に低い結果となり、ここでも距離化スキルやメタ認知の重要性が示唆されている (石井・新堂, 2011)。つまり、対人的距離化スキルとしての回避や欺瞞を含んだコミュニケーションや、そうしたスキル行使時におけるメタ認知の役割は部分的に立証されつつある。

しかし、現在明らかになっているメタ認知や対人的距離化スキルの機能は未だ限定的である。その理由として、石井 (2011) と石井・新堂 (2011) によるこれまでの調査はそれぞれ、対象者の年齢層や焦点を当てている社会的適応指標が一致していないためということが挙げられる。どちらも大まかには青年期を対象としているが、現代では青年期の期間が長期に亘ってきており、青年期間内での区分が必要と考えられている (Coleman, 2011

；加藤・高木，1997など）ことを鑑みると、両研究の対象者は異なる段階に属すると考える方が妥当である。従って、青年期後期段階である大学生において明らかになっている主観的適応感に対する効果がそれ以前の発達段階においても見られるかは今のところ示されていない。また、青年期は対人関係の形態が大きく変化していくことが示されている（Coleman, 2011など）が、そういった対人関係の広がりに伴ってメタ認知や各スキルがどのように発達しうるのかどうかについても併せて明らかにしなければならないだろう。

そこで本研究では、まず調査1において、青年期前期、中期、後期各時点におけるメタ認知、各スキル得点の比較を行う。さらに調査2において、石井（2011）で既に主観的適応性の検討が行われている青年期後期よりも前の段階対象として、石井（2011）と同じ変数を用いた質問紙調査を行い、メタ認知、各スキルが主観的適応感に及ぼす影響について検討する。2つの調査を通して、メタ認知、各スキル行使傾向が青年期内の発達過程においていかに変遷しうるか、また青年期前半段階の主観的適応感に、それらがいかに機能しうるかを整理し知見を得ることを目的としたい。

調査1 青年期前、中、後期における社会的スキル、メタ認知得点比較

方法

調査対象者² (a) 青年期前期群：佐賀県下及び大阪府下の公立中学1、2年生345名（男子171名、女子174名）。年齢範囲は12～14歳、平均年齢13.01歳（標準偏差0.89）。(b) 青年期中期群：大阪府下の公立高校1～3年810名（男子375名、女子435名）。年齢範囲は15～18歳、平均年齢16.01歳（標準偏差1.17）。(c) 青年期後期群：京都府及び大阪府下の大学生540名（男

2 青年期中期群、後期群の対象者年齢にどちらも18歳が含まれているが、今回は身分によって群分けを行った。尚、中期群における18歳の対象者の割合は1%と少数であった。

性185名、女性355名)。年齢範囲は18～25歳、平均年齢19.95歳（標準偏差1.74）。

質問紙の構成 (a) メタ認知尺度：石井(2007)による。自らのコミュニケーションやその状況についてどれだけ理解しているかを問う内容の10項目からなる。4件法。(b) 対人的接近－距離化スキル尺度：石井(2007)作成の表出－非表出スキル尺度を、石井・新堂(2011)によって実際の項目内容に沿うよう、名称変更したもの。ポジティブなスタイルのスキル（対人的接近スキル）だけではなく、相手との距離を取るスキル（対人的距離化スキル）も含めた尺度。接近スキルについては6項目、距離化スキルについては8項目。この尺度はスキル行使を相手との親密性ごとに測定する形式で、各項目に対して、「親しい人（家族や友人）が相手だった場合」「友人を除く活動の仲間が相手だった場合」「親しく無い人が相手だった場合」の3通りに回答を求めた（図1の例参照）。4件法。

1 意見が食い違ったときに相手の意見に合わせる	普段どの程度行いますか。
親しい人が相手の場合・・・・・・・・・・	全く－あまり－たいてい－いつも
中くらいに親しい人が相手の場合・・・・	全く－あまり－たいてい－いつも
親しくない人が相手の場合・・・・・・・・・・	全く－あまり－たいてい－いつも

図1 スキル尺度回答形式例

結果

確認的因子分析 メタ認知得点、スキル得点について全ての群を合わせて確認的因子分析を行ったところ、石井(2007)や、石井・新堂(2011)と同様、メタ認知尺度に関しては1因子解、対人的接近スキル－距離化スキルに関しては「対人的接近スキル因子」と「対人的距離化スキル因子」の2因子解が妥当との結果が得られた。

信頼性分析の結果、メタ認知尺度の α 値は青年期前期、中期、後期の順に $\alpha = .71 / .71 / .69$ であった。また対人的接近スキル因子、距離化ス

ル因子の α 値は青年期前期、中期、後期の順に接近スキルでは $\alpha = .72 / .68 / .76$ となり、距離化スキルでは $\alpha = .65 / .65 / .75$ となった。特に青年期前期、中期群における距離化スキル因子で信頼性係数が低い結果となったが、今回は群間の得点比較が目的であるため、全群で同一の因子構造を想定する必要がある。したがって、因子分析の結果を採用して群間で共通の変数化を行った。

各得点比較 メタ認知、対人的接近スキル、対人的距離化スキルの各得点を従属変数とし、メタ認知については発達段階を要因とした1要因3水準の分散分析を、対人的接近スキル、距離化スキルについては発達段階（3水準）と親密性（高中低の3水準、被験者内要因）を要因とした2要因分散分析を行って各得点を比較した（表1に各平均点と標準偏差）。

表1 発達段階群別のメタ認知、対人的接近スキル、対人的距離化スキル得点の平均値及び標準偏差

	メタ認知	接近スキル			距離化スキル		
		親密性高	親密性中	親密性低	親密性高	親密性中	親密性低
前期	27.20 (5.38)	17.26 (3.32)	14.48 (3.08)	11.85 (3.42)	20.04 (3.32)	20.55 (3.44)	20.35 (4.44)
中期	27.54 (5.76)	17.93 (2.87)	14.75 (2.95)	11.96 (3.17)	19.54 (3.41)	21.45 (3.27)	22.29 (3.87)
後期	28.51 (4.84)	18.23 (2.89)	14.89 (2.97)	11.66 (3.25)	20.32 (3.54)	22.46 (3.56)	22.69 (4.23)

※（ ）内は標準偏差

その結果、まずメタ認知得点 ($F(2,1692)=7.72$) において、発達段階の主効果が認められた ($p < .01$)。Bonferroniによる多重比較を行ったところ、前期群<後期群で有意差が認められた ($p < .01$ 、図2)。

対人的接近スキルでは、親密性の主効果 ($F(2,3342)=2762.72, p < .01$)、発達段階と親密性の交互作用効果 ($F(4,3342)=8.04, p < .01$) が有意に

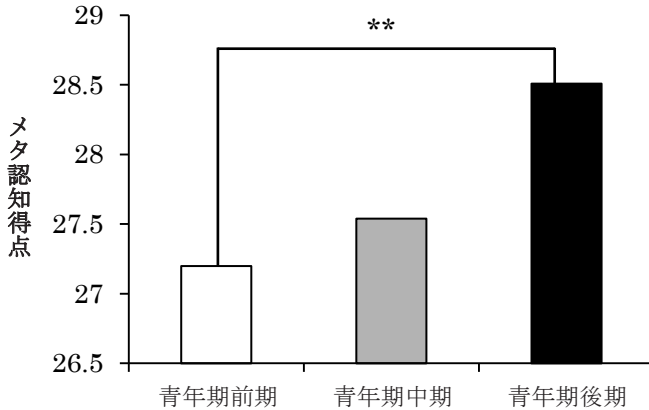


図2 メタ認知群別得点

認められたが、発達段階の主効果は有意ではなかった ($F(2,1671)=2.88$, $p=n.s$)。まず親密性の主効果について Bonferroni の多重比較を行ったところ、低条件<中条件<高条件で有意差が認められた ($p<.01$)。また、交互作用効果が有意だったため単純主効果の検定を行ったところ、親密性高条件でのみ発達段階の主効果 ($F(2,1635)=10.29$, $p<.01$) が有意に認められ、Bonferroni の多重比較の結果、前期群<中期群、前期群<後期群が有意であった (いずれも $p<.01$)。中条件 ($F(2,1693)=2.65$)、低条件 ($F(2,1693)=1.14$) では発達段階の主効果は認められなかった。また、全ての発達段階群において親密性の主効果が認められた (前期群においては $F(2,670)=431.68$ 、中期群においては $F(2,1614)=15239.32$ 、後期群においては $F(2,1058)=1319.48$ 、いずれも $p<.01$)。Bonferroni の多重比較の結果、全ての群において親密性低条件<中条件<高条件で有意差が認められた (いずれも $p<.01$)。これは、石井 (2007) や石井・新堂 (2011) と一致する行使傾向であった。

対人的距離化スキルでは発達段階の主効果 ($F(2,1648)=24.37$)、親密性の主効果 ($F(2,3296)=240.25$)、発達段階と親密性の交互作用効

果 ($F(4,3296)=34.34$) 全てが有意に認められた (いずれも $p<.01$)。まず発達段階と親密性の主効果について Bonferroni の多重比較を行ったところ、発達段階では前期群<中期群<後期群で、親密性では低条件>中条件>高条件で有意差が認められた (どちらも $p<.01$)。また、交互作用効果が有意だったため単純主効果の検定を行ったところ、親密性高条件 ($F(2,1635)=9.00$)、中条件 ($F(2,1635)=33.15$)、低条件 ($F(2,1635)=34.91$) の全てにおいて発達段階の主効果が有意で (いずれも $p<.01$)、Bonferroni の多重比較からは、親密性高条件において中期群<後期群、中条件において前期群<中期群<後期群、低条件において前期群<中期群、前期群<後期群で有意差が認められた (全て $p<.01$)。また、青年期中期群 ($F(2,1586)=305.85$)、後期群 ($F(2,1052)=150.98$) において親密性の主効果が認められ、Bonferroni の多重比較から、低条件>中条件>高条件で有意差が認められた (どちらも $p<.01$) が、前期群においては親密性の主効果は有意ではなかった ($F(2,658)=3.13, p=n.s$)。中期、後期における親密性条件別の得点変化傾向は、石井 (2007) や石井・新堂 (2011) における一般高校生の傾向と一致していた。図3、4に各群、条件ごとの接近スキル得点と距離化スキル得点を示す。

考察

メタ認知、対人的接近スキル、対人的距離化スキルの全てで発達段階の主効果が認められた。しかし、多重比較の結果は各得点の発達に応じた変遷の様子が異なることを示唆するものであった。まずメタ認知に関しては、前期群と後期群との間にのみ有意差が認められたが、これは対人関係状況や自らのコミュニケーションスタイルの把握が、青年期の間に発達しつつあることを反映していると考えられる。前期・後期両群と中期群との有意な差は認められなかったが、平均値をみると、青年期中期群のメタ認知得点は後期段階の得点よりも低くなっている。中期段階はこうした能力発達の過渡期なのかもしれない。次に、対人的接近スキルについては、親密性

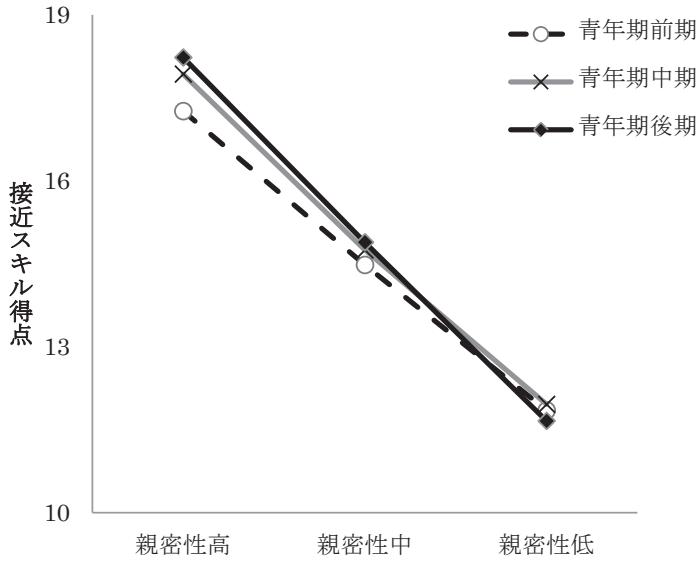


図3 对人的接近スキル群別、親密性条件別得点

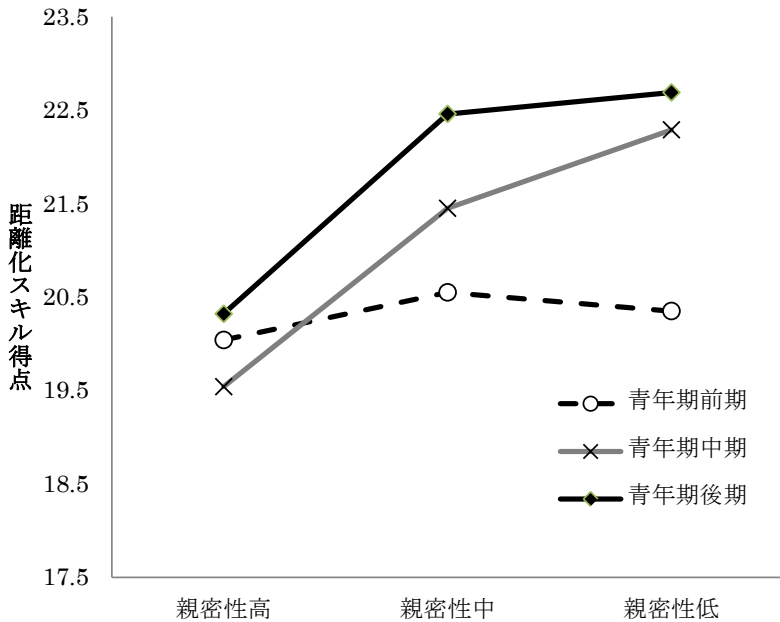


図4 对人的距離化スキル群別、親密性条件別得点

高条件でのみ前期群と中期群、前期群と後期群との間に有意差が見られたが、中期群と後期群の間には有意な差が見られなかった。平均値においても中期と後期の差は僅かであることが見てとれる。また、その他の条件では群間差は見られなかった。さらに、親密性要因の主効果は全ての発達段階において見られ、相手との親密性に応じた接近スキルの使い分け傾向は全ての群で共通していた。今後、青年期後期より後の段階との比較を行う必要があるが、接近スキルは、少なくとも親密性が比較的低い相手に対して行使することに関しては、青年期中期段階でそれ以降の段階のレベルにほぼ達し、相手との親密性に応じた使い分けスタイルも完成するものなのかもしれない。最後に、対人的距離化スキルに関しては、全般的傾向として前期と中期、中期と後期それぞれの間には有意差が認められた。距離化スキル全般は少なくとも青年期の間は、漸次発達していきつつあるものと考えられる。しかし、親密性高条件に限って言えば、中期群の得点が最も低くなるという、発達に伴うスキル変遷の道筋とは異なる結果が得られた。また、前期群では親密性要因の主効果が認められず、相手に応じたスキルの使い分けが、この時点では行われていないことが明らかとなった。このスキルに関しても、青年期より後の年代との比較を行うことが要されるだろう。

調査1の結果から、青年期の中でもその区分段階によって、メタ認知や社会的スキル行使度合いが量的に異なることが明らかとなった。そこで調査2において、青年期中期における主観的適応感への機能を検討し、この段階におけるメタ認知、各スキルの質的な特徴を考察することとする。ただし、調査1において、青年期前期群のメタ認知得点や両スキル得点が低く、また距離化スキルに関しては相手に応じた使い分けが未だ出来ていないと考えられるため、調査2では中期群についてのみ検討を行うこととする。

調査 2 青年期中期群における主観的適応感とメタ認知、社会的スキルとの関連

方法

調査対象者³ 大阪府下の高校生1～3年生527名（男子256名、女子271名）。年齢範囲は15～17歳、平均年齢16.4歳（標準偏差0.69）。

質問紙の構成 (a) メタ認知尺度、(b) 対人的接近 - 距離化スキル尺度は、調査 1 と同様の尺度を使用した。また、主観的適応感の尺度として、石井 (2011) と同様に以下 (c) (d) の2尺度を使用した⁴。(c) 情動経験傾向尺度：Izard ら (1993) の Differential Emotions Scale-IV (DES) を翻訳し、新たに pride に関する3項目を加えたもの。計13種の各情動を日常生活の中でどの程度経験しやすいかを測るもの。情動毎に3項目の質問がある。全39項目、4件法。(d) 自尊感情尺度；Rosenberg の翻訳版を用いた。全10項目、4件法。

結果

既に明らかになっている青年期後期との結果を比較するため、石井 (2011) にならい、DES をポジティブ基本的情動（喜び、興味）、ネガティブ基本的情動（悲しみ、恐れ、怒り、嫌悪）、ポジティブ自己意識的情動（誇り）、ネガティブ自己意識的情動（恥、自己嫌悪、罪悪感、照れ）の4変数に要約した⁵。信頼性分析を行ったところ、信頼性係数 α はそれぞれ、ポジティブ基本的情動で.63、ネガティブ基本的情動で.80、ネガティブ自

3 調査 2 の対象者は、調査 1 の対象者と一部重複している。

4 DES 尺度自体は適応感の測定を目的として作成されたものではないが、well-being の指標として有用であると考えられる。このことに関しては、石井 (2011) を参照されたい。

5 DES の項目には、その他に驚き、軽蔑に関するものが含まれているが、石井 (2011) では、因子分析の際に除外された。そのため、本研究でもこれらに関する変数については使用しなかった。

己意識的情動で.81であった（ポジティブ自己意識的情動は1項目のため、信頼性係数は算出されない）。

その後、DESの各得点と自尊感情得点を従属変数として、親密性（高、低）条件毎に、接近化スキル高低群 × メタ認知高低群、距離化スキル高低群 × メタ認知高低群での2要因の分散分析を行った。尚、メタ認知は、全ての条件で同一の変数を用いた。

その結果、まず、メタ認知の有意な主効果はDESの4得点全てにおいて認められた（ネガティブ自己意識的情動（ $F(1,451)=13.38$ 、ポジティブ自己意識的情動（ $F(1,454)=17.30$ ）、ネガティブ基本的情動（ $F(1,446)=14.68$ ）、ポジティブ基本的情動（ $F(1,437)=14.65$ ）、全て低<高、 $p<.01$ ）が、自尊感情に関しては見られなかった（ $F(1,443)=0.54$ 、n.s）⁶。

その他の結果については、関係性条件別に以下の通り記す。**親密性高条件** 接近スキルの主効果が有意に見られたのは自尊感情（ $F(1,451)=9.33$ ）、ポジティブ自己意識的情動（ $F(1,456)=10.56$ ）、ポジティブ基本的情動（ $F(1,439)=16.45$ ）で（全て $p<.01$ 、低<高）、距離化スキルの主効果が認められたのはネガティブ自己意識的情動（ $F(1,445)=10.36$ 、 $p<.01$ 、低<高）であった。**親密性中条件** 接近スキルの有意な主効果は自尊感情（ $F(1,450)=8.46$ 、 $p<.01$ ）、ポジティブ自己意識的情動（ $F(1,456)=15.04$ 、 $p<.001$ ）、ポジティブ基本的情動（ $F(1,439)=11.40$ 、 $p<.01$ ）（全て低<高）、ネガティブ自己意識的情動（ $F(1,447)=5.00$ 、 $p<.05$ 、低>高）で、距離化スキルの有意な主効果は自尊感情（ $F(1,450)=8.46$ 、 $p<.01$ 、低>高）、ネガティブ自己意識的情動（ $F(1,446)=17.69$ 、 $p<.01$ ）、ネガティブ基本的情動（ $F(1,447)=5.58$ 、 $p<.05$ ）で見られた（全て低>高）。また距離化スキルとメタ認知の交互作用がポジティブ自己意識的情動において有意であった（ $F(1,455)=4.11$ 、 $p<.05$ ）ため、単純主効果の検定を行ったところ、距

6 メタ認知得点は全ての条件で同じ変数を使用したため、ここでの統計値は親密性高条件のものを記載した。

離化スキル低群におけるメタ認知の主効果が有意だった ($F(1,203)=20.78$, $p<.05$ 、低<高、図5)。

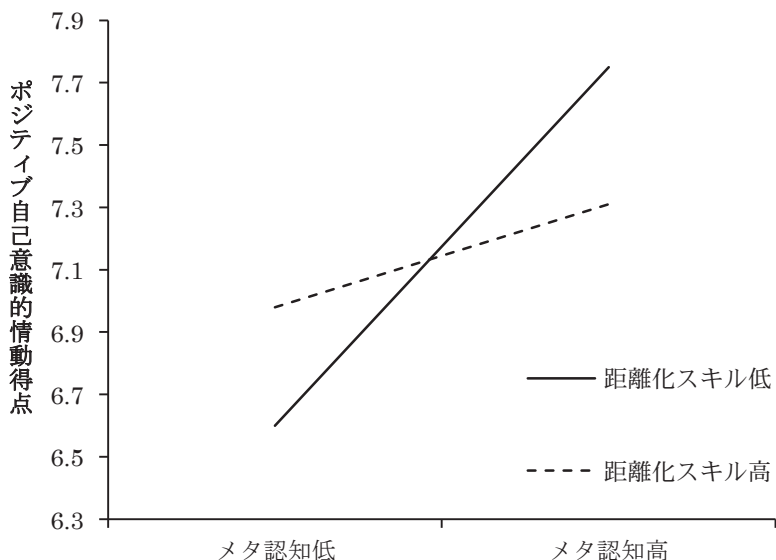


図5 親密性中条件における距離化スキル、メタ認知高低群別のポジティブ自己意識的情動得点

親密性低条件 接近スキルの主効果はポジティブ自己意識的情動 ($F(1,457)=5.74$)、ポジティブ基本的情動 ($F(1,440)=4.95$) (いずれも低<高) とネガティブ自己意識的情動 ($F(1,448)=13.45$ 、低>高) において、距離化スキルの主効果はネガティブ自己意識的情動 ($F(1,446)=6.54$ 、低<高) で有意であった (全て $p<.05$)。

考察

全体的に青年期後期段階を対象にしていた石井 (2011) とは異なる結果が得られたといえる。まず、メタ認知は自尊感情との関連が見られず、DES 得点においてはポジティブ情動、ネガティブ情動どちらへも正の影

響を与えていた。また、どの条件でも接近スキルは自尊感情やポジティブ情動の高さ及びネガティブ情動の低さと、一方距離化スキルは自尊感情の低下やネガティブ情動の高さとのみ関連しており、青年期後期段階を対象とした研究で報告されていたようなメタ認知と距離化スキル行使との交互作用効果は認められなかった。唯一交互作用が認められた親密性中条件においても青年後期段階とはその傾向が異なっており、メタ認知を働かせた上で取って距離化スキルを「低下させる」ことがポジティブ情動の高さと関連する可能性が示唆されていた。これらの結果は青年期の、特に初期段階における親密な関係への強い動機づけという発達の背景 (Coleman, 2011など) を反映しているのかもしれない。

調査2の結果からは、青年期中期段階でメタ認知や距離化スキルが後期段階と同様の働きを果たしていないことが示された。しかし、先述の通り、先行研究の結果からはこの年代においてもメタ認知や距離化スキルが一定の機能性を持ちうるということが考えられている。次節で調査1、2の結果をまとめようとして、これまでの研究結果との違いを考察し、青年期間内における対人関係行動傾向及びその適応性の変遷について述べることにしたい。

総合考察

本研究の目的は、青年期の諸段階を対象とした2つの調査を通して、メタ認知や社会的スキル行使傾向の発達の變遷と、メタ認知、対人的接近スキル、対人的距離化スキルの機能性が青年期間内でどのように変化しているかについての知見を得ることであった。

まず、調査1での各得点比較の結果からは、メタ認知、各スキルに発達段階群間の全て、あるいは一部で有意な得点差が見られた。これは前述した青年期における対人関係の多様化に伴って、この時期に対他的能力が大きく変化することを示唆するのであろう。ただし、調査1の考察で既に述べた通り、多重比較の結果からは、それぞれが独自の発達軌跡を辿りうるということが推測される。

対人接近スキルは親密性の高い相手に対する行使では発達段階による差が認められたが、全体的には比較的早い段階で身に付けることが考えられる。また、相手に応じた行使の調節も青年期前期の段階から中期、後期と同様の傾向で行っていることが示唆された。情動表出行動制御の発達に関する研究では、10～11歳頃になると社会的表示規則を使用し自らの感情表出を制御できるようになる (Saarni, 1979) が、こうした表出の調節は小学校5年生と高校生とで発達差が見られないと報告されている (Gnepp & Hess, 1986) ことから、他者に対して自らの心情の表明を制御する能力は早い段階で完成すると推測できる。本研究で測定した接近スキルは感情表出のみではないが、今回の結果はこうした知見と一致するかもしれない。それに対して、メタ認知や距離化スキルは青年期の前期から後期までを通して、時間をかけて獲得していく可能性が示された。社会的認知の発達段階を提案した Selman (1980) によると、青年らは10歳～15歳頃には自他双方の視点を一般的な第三者的立場からとらえる段階に達し、15歳を過ぎる頃に、より抽象的な対人的視点取得段階に進むとされているが、メタ認知が青年期中期段階で過渡期にある可能性を示した今回の結果は、この主張に沿うものと考えられる。一方、距離化スキルは接近スキルとは異なり、獲得や行使調節スタイルの完成が遅いことを示唆する結果が得られた。また、年代が進むに伴って得点が高くなるのではなく、親密性高条件では高校生段階の中期群がもっとも距離化スキル得点が低いという結果であった。青年期初期中期段階において友人集団への所属欲求が高いこと (Coleman, 2011) や、高校生段階でクラウドと呼ばれる友人集団の境界が消え始めること (Brown, 1990) が指摘されている点を鑑みると、青年期中期段階は、新たな対人関係や所属集団を探索、拡張していく時期と捉えられる。そういった時期に、相手との距離を取って取ろうとする距離化スキルの行使は一旦減じられるのかもしれない。また、青年期ではその後年齢が上がるにつれて、友人ネットワークはより排他的になるといわれているが (De Goede et al., 2009)、それが後期段階での距離化スキル得

点の高まりと関連するのかもしれない。さらに、距離化スキルの相手に応じた調節は前期段階では見られなかった。これは距離化スキルの調整が、上で述べた感情表出の調節能力とは違い、単なる内的状態表出の制御ではなく「虚偽の表出」の調整にあたるからだと考えられる。従って、今後こうしたスタイルの調整について特に焦点をあてた吟味が必要だといえる。

次に調査2の結果から、青年期中期段階では、青年期後期を対象とした結果とはメタ認知の主効果が異なり、本人のポジティブな感覚にもネガティブな感覚へも影響を及ぼすことが明らかになった。この時期には対人関係状況を高く把握していることが、主観的な感覚に必ずしも常に良い影響を与えるのみではないことが伺える。状況の正確な認知が負の情感と関連することは、例えば、「抑うつリアリズム」として知られる抑うつ者の過度に正確な状況認知傾向 (Alloy & Abramson, 1979) や、Mayer (2006) が挙げている、情動的知能の高い人が、他者の気付かないことに気付いてしまうために欲求不満に陥る可能性などにおいて指摘されているが、調査1における青年期前期、中期、後期との得点比較で差があったことから、メタ認知自体が中期段階では発達途中と考えられ、そうした不安定な時期に周りの者よりも状況を(時に過度に)把握することが、正負どちらの情感へもつながることは十分に考えられる。

また、どの相手条件でも接近スキルは自尊感情やポジティブ情動の高さ及びネガティブ情動の低さと、距離化スキルは自尊感情の低下や、ネガティブ情動の高さとのみ関連することが明らかになった。この結果から、青年期中期段階においては、どのような関係性の相手に対しても接近スキルを積極的に行使し、距離化スキルを抑制するというスタイルが適応的と推測される。しかし、石井・新堂 (2011) での結果を併せて考察すると、同じ青年期中期段階でのメタ認知及び対人的距離化スキルは、非行リスクを防ぐ役割を果たしている可能性が示唆されていたはずである。今回の結果と先行研究での知見を併せて考察すると、この段階では対人的距離化スキルの機能性について、ある種のギャップ(実際の危険回避と主観的感覚

とのズレ)が生じているとも考えられる。つまり、距離化スキルの行使は無意図の段階で非行に巻き込まれるリスクから青年らを遠ざけるものの、本人達の主観的感覚としてはそれがネガティブな心情につながるという齟齬が起きているのかもしれない。一般高校生は、主観的な適応の感覚には沿わないものの、メタ認知や距離化スキルを知らず知らずのうちに行使し、結果的に効果を持つように扱っているのかもしれない。また、石井(2011)において青年期後期では自尊感情やポジティブ情動経験におけるメタ認知と距離化スキルの交互作用効果が見られることから、その後の後期段階においてはメタ認知や距離化スキル行使が部分的に主観的適応感とつながることが明らかになっている。青年期中期から後期に発達が進む中で距離化スキル効果の自覚的な発見が起きたり、それに基づく意図的な行使が可能になったりすることも考えられる。

本研究において、メタ認知や対人的距離化スキルは青年期の期間中にその行使傾向や機能性が変化すると示唆された。この結果を実践介入に応用するならば、距離化スキルを含めた多様なスキルレパートリーを想定し、発達段階に応じて適応的なスキルが異なるという前提で、対象者がその段階で獲得すべきスキルやそれに関わる能力に応じたプログラムを作成すること、また客観的には機能的なスキルだとしても、本人の主観的な感覚ではその機能性を意識できていない可能性があることを押さえた上で、いかに本人の気づきにつなげるかを考慮することが重要だと推測できる。ただし、距離化スキルがいかなる道筋で獲得されるのか、またその機能性がどのような過程を経て本人に自覚され、主観的情感に正の影響を与えるようになるのかについては、さらに発達段階や適応の指標を拡げた検討が必要となるだろう。

文献

- 相川 充 (2009). 新版人づきあいの技術 社会的スキルの心理学セレクション社会心理学-20 サイエンス社
- 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993). 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究 —孤独感と社会的スキルとの関係— 社会心理学研究, 8, 44-55.
- Alloy, L. B., & Abramson, L. Y. (1979). Judgment of contingency in depressed and nondepressed students: Sadder but wiser?. *Journal of experimental psychology: General*, **108**, 441-485.
- Argyle, M. (1967). *The psychology of interpersonal behavior*. Penguin books. (M.アージェル (著) 辻 正三・中村陽吉 (訳) (1972). 対人行動の心理 誠信書房)
- Brown, B (1990). Peer groups and peer culture In Feldman, S & Elliott, G (Eds), *At the Threshold: the developing adolescent*. Harvard University Press. Cambridge, MA.
- Coleman, J.C. (2011). *The nature of adolescence* (4th ed). London, UK: Routledge.
- DePaulo, B. M., & Morris, W. L. (2004). Discerning lies from truths: Behavioral cues to deception and the indirect pathway of intuition. In Granhag, P. A. & Strömwall, L. A. (Eds.), *The detection of deception in forensic contexts*, pp15-40.
- DeRosier, M. E., & Marcus, S. R. (2005). Building friendships and combating bullying: Effectiveness of SS GRIN at one-year follow-up. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, **34**, 140-150.
- Dodge, K.A. (1986). "A social Information processing Model of Social Competence in Children In M. Perlmutter (Ed.), *Minnesota symposium in child psychology* pp. 77-125. Hillsdale,

NJ: Lawrence Erlbaum.

- Doll, E.A. (1953). *Measurement of social competence: A Manual for Vineland Social Maturity Scale*. American Guidance Service.
- Gnepp, J., & Hess, D.L. (1986). Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental psychology*, **22**, 103-108.
- Hall, W.E., & Gaeddert, W. (1960). Social skills and their relationship to scholastic achievement. *Journal of Genetic Psychology*, **96**, 269-273.
- 原田純治 (1988). 援助手控えの援助性認知に関わる要因に関する研究
長崎大学教育学部 教育科学研究報告, **54**, 75-85.
- Hargie, O. (Ed.), (2006). *The handbook of communication skills*. (3rd ed) Psychology Press.
- 畑中美穂 (2003). 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響
心理学研究, **74**, 95-104.
- 五十嵐 祐 (2002). CMC の社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性
社会心理学研究, **17**, 97-108.
- 石井佑可子 (2006). 社会的スキル研究の現況と課題 — 「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて—
京都大学大学院教育学研究科紀要 **52**, 347-359.
- 石井佑可子 (2007). “メタ・ソーシャルスキル”測定尺度作成の試み
京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 286-298.
- 石井佑可子 (2011). 对人的接近-距離化スキルの機能: 相手との関係性別分析.
東京大学大学院教育学研究科紀要 **50**, 111-118.
- 石井佑可子・新堂研一 (2011). 在宅非行少年における社会的スキルの様相--メタ認知, 对人的距離化スキルの観点から.
臨床心理学, **11**, 65-76.
- Izard, C.E., Libero, D.Z., Putnam, P., & Haynes, O.M. (1993). Stability of Experiences and Their Relations to Traits of Personality.
Journal of Personality and Social Psychology, **64**, 847-860.

- Jordan, J. M., & Roloff, M. E. (1997). Planning skills and negotiator goal accomplishment: The relationship between self-monitoring and plan generation, plan enactment, and plan consequences. *Communication Research*, **24**, 31-63.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1997). 青年心理学概論 誠信書房
- Marzillier, J. S., & Winter, K. (1978). Success and failure in social skills training: Individual differences. *Behaviour research and therapy*, **16**, 67-84.
- Murai, J. (2000). Deception in everyday life of Japanese young adults. *The Japanese journal of personality* **9**, 56-57. (in Japanese with English title)
- Saarni, C. (1979). Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental psychology*, **15**, 424-429.
- Segrin, C., & Abramson, L.Y. (1994). Negative Reactions to Depressive Behaviors: A communication Theories Analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, **103**, 655-668.
- Selman, R. (1980). *The growth of interpersonal understanding: developmental and clinical analyses*. Academic Press. London.
- 繁栴江里・池田謙一 (2003). コミュニケーションにおける否定的フィードバックの抑制の対人的効果: 「その人とぶつかるくらいなら言いたいことを言わない」ことは何をもたらすか. *社会心理学研究*, **19**, 30-40.
- Snyder, M. (1974). Self Monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- Snyder, M. (1987). *Public appearances/public realities: The psychology of self-monitoring*. (New York: Freeman)
- Spitzberg, B.H., & Cupach, W.R. (1988). *Handbook of interpersonal competence research*. Springer.
- Trower, P. (1995). *Adult social skills: State of the art and future*

directions. In O'Donohue, W. & Krasner, L(Ed.), Handbook of psychological skills training: Clinical techniques and applications pp54-80.

和田 実 (1991). 対人有能性に関する研究 —ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成— 実験社会心理学研究, **31**, 49-59.

渡辺弥生・星雄一郎 (2009). 中学生対象のソーシャルスキルトレーニングにおけるセルフマネジメント方略の般化促進効果. 法政大学文学部紀要 **59**, 35-49.

Whitehouse,R., Chamberlain,P., & O'brien,A. (2001). Increasing social interactions for people with more severe learning disabilities who have difficulty developing personal relationships. *Journal of Learning Disabilities*, **5** 209-220.

Witt, L.A., & Ferris, G.R. (2003). Social skill as Moderator of the Conscientiousness-Performance Relationship: Convergent Results Across Four Studies. *Journal of Applied Psychology*, **88** 809-820.